

年間ドル/円、前年ドル安値が下値の参考に 過去2年は139円後半、ドル下押し時は－3円から－5円

(株) ジャパンエコノミックパルス
Japan Economic Pulse Co., Ltd.
info@j-pulse.co.jp

2026/2/2 (月)

為替ドル/円は昨年と同じように1月からドルが反落となってきたが、年間ドル安値の参考基準としては前年ドル安値の前後が注目される。過去2年は年間ドル安値が139円後半で同水準となったほか、過去30年での波乱相場以外のドル下押し時は、前年ドル安値比－3円から－5円前後となっている（135－137円）。一方でアベノミクス始動とデフレ・円高歯止めの2013年以降は、13年のうち6回が前年比＋10円以上のドル底上げとなってきた（149円以上）。テクニカル面では目先の下値抵抗線として、148－150円前後が注目される。

過去13年で6回は前年比10円以上のドル高

為替相場のドル/円は1月23日からドル/円でドルが急反落となり、為替動向は日米の政治・政策要因などで不透明感が高まっている。今年1年スパンの年間ドル安値でいえば、参考基準として注目されるのが前年の年間ドル安値水準だ。

ブルームバーグでのレート数値によると、最近では昨年2025年が139.89円、2024年が139.58円と同水準となっており、今年もドル安進展の場合、同レベルの方向がドルの下値メドとして注目される。最近の年間ドル安値としては、2020年が101.18円で翌2021年は102.59円、2018年が104.56円で翌2019年は104.45円という、「前年ドル安値」が下値メドになるケースも見られてきた。

1996年から2025年にかけての30年実績によると、リーマン・ショックのような波乱相場時を除けば、平時におけるドルの下押し年では、前年ドル安値比で－3円から－5円というケースが見られてきた。具体的には2020年が前年比－3.3円、2018年が－2.8円、2011年が－4.8円、2010年が－4.6円、2009年が－2.3円などとなっている。この点では昨年ドル安値139.89円に対し、135円から137円前後が意識される。

一方、日本でアベノミクス始動とデフレ・円高基調に歯止めが掛かった2013年以降は、13年のうち6回が前年のドル安値比＋10円から＋15円のドル底上げとなってきた。その点で今年は昨年ドル安値139.89円に対し、＋10円の149円前後などが年間ドル安値となる可能性も非現実的ではない。

ちょうどドル/円の月足テクニカル面では、目先のドル下値メドとして148－150円前後が焦点になっている。2021年以降の過去5年、短期的なドルの下抜け場面があっても、基本的なドルの下値抵抗線となってきた重要ラインとして、昨年12月末時点の数値ベースで、月足・一目均衡表の基準線150.76円、

転換線148.89円、36カ月（3年）移動平均線147.70円などがある。

2023年以降の重要な下値抵抗線では昨年12月末時点の数値ベースで、600カ月（50年）移動平均線141.82円、576カ月（48年）移動平均線135.99円などが注目されそうだ。

ドル/円の年間ドル高値と年間ドル安値については、前年に取引量の多かった「中心的な相場」からの変動幅も参考になる。日銀は東京外為市場でのドル/円スポット（直物）取引について、中心相場を集計している。取引金額で測ったその日の代表的なスポット相場で、ブローカーに当該日に最も取引の多かった出来値（実際に取引が行われたレート）を聴取したものだ。

昨年2025年は日中ベースの中心相場・年間平均が、149.56円となっていた。最近では年平均の中心相場に対し、翌年ワールド・レート（オセアニアからNY）での年間ドル高値の上昇幅が、2025年＋7.3円、2024年＋21.4円、2023年＋20.3円、2022年＋42.1円、2021年＋8.8円となっている。

今年は昨年の平均149.56円に対し、＋10円で159円半ば方向、＋20円で169円半ば方向になる。

年間ドル/円、前年「中心相場平均」比も参考に

前年の中心相場・年間平均に対する年間ドル安値は、2025年が－11.7円、2024年が－1.0円、2023年が－4.3円、2022年が＋3.6円、2021年が－4.1円、2020年が－7.8円、2019年が－5.9円、2018年が－7.6円といった下落幅となっている。今年は昨年の平均149.56円に対し、－4円で145円半ば、－8円で141円半ば、－10円で139円半ばという計算になる。

テクニカルではドル/円の重要下値抵抗線となっている月足・一目均衡表の基準線について、「基準線」の名前の通り、月間ベースでの変動の基準値として参考になる。前月末における基準線の水準と、翌月の月間ドル高値の乖離幅については（月間ドル高値－前月末時の基準線）、3カ月移動平均や長期の240カ月（20年）移動平均などが、月間ドル高値の水準予測や、ドルが上振れ過熱してきたか否かの判断材料となる。

例えば昨年12月の場合、前月11月末時点で月足の基準線は150.76円となっていた。11月段階で同乖離幅は3カ月平均が＋3.7円、240カ月平均が＋4.3円となっている。その後に12月の月間ドル高値は157.78円となり、前月の基準線150.76円比では＋7.0円のドル高となっていた。ややドル高が上振れ

過熱となったが、基本的なドル上昇の方向性は、乖離幅の平均トレンドに即したプラス幅となっている。

この月足・基準線は昨年9月から12月にかけて、150.76円と同水準で位置している。それに対して「月間ドル高値－前月末の基準線」乖離幅の平均トレンドは、12月時点で3カ月平均が+5.9円、240カ月平均が+4.3円となっている。

現状の今年1月の場合、月間ドル高値は159円超えとなっており、+8円以上のドルのプラス乖離となっている。ドル高に上振れ過熱が見られ、1月23日以降はドルが急反落となっているが、来月2月以降の月間ドル高値も、こうした乖離幅の平均が参考になる。引き続き基準線は150.76円が持続と仮定すると、2月の月間ドル高値は+5.9円で156.66円方向、+4.3円で155.06円方向が参考メドになる。

ドル/円の月間ドル安値も、前月末時点の基準線との乖離幅が参考になる。「月間ドル安値－前月末の基準線」乖離幅は、12月時点で3カ月平均が+0.5円、240カ月平均が－0.5円となっている。現在の場合、前月12月末時の基準線は150.76円であり、1月のドル安値は+0.5円で151.26円前後、－0.5円で150.26円前後が参考のメドになる（1月28日の

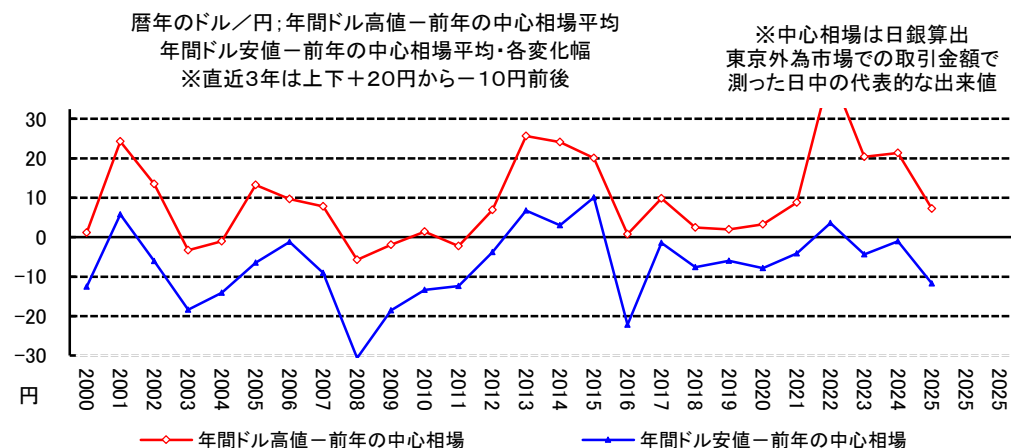
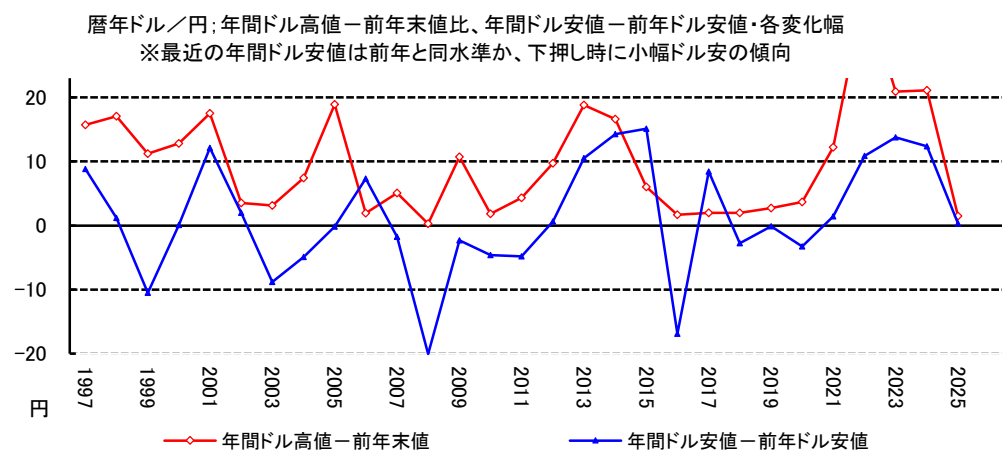
アジア市場時点で月間ドル安値は152.10円前後）。

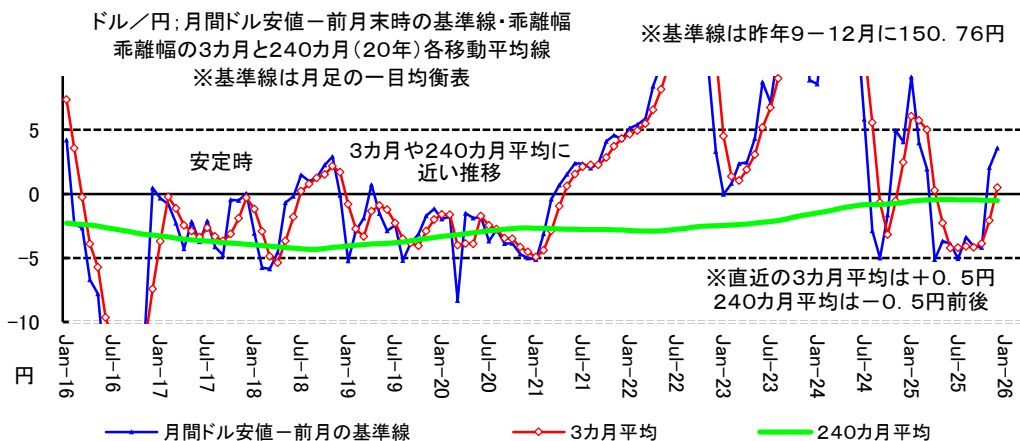
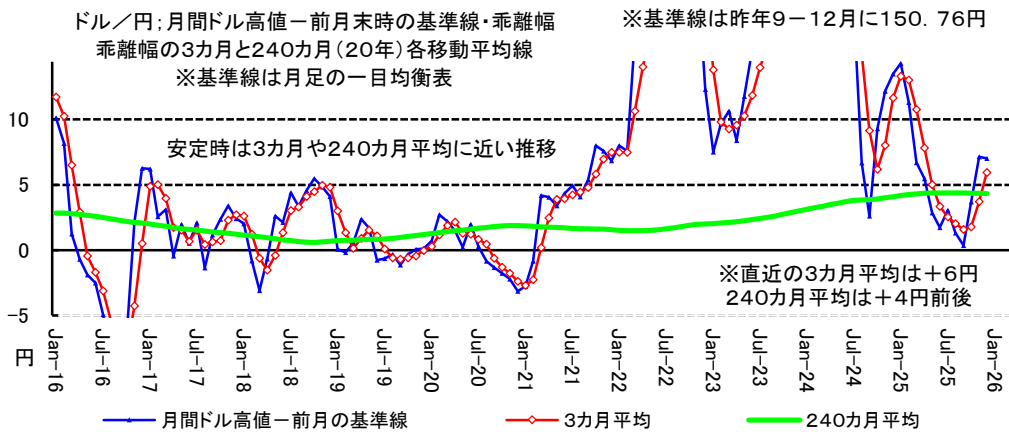
来月2月以降の月間ドル安値についても、前月末時の基準線（12月段階では150.76円）に対する直近の乖離幅平均、+0.5円や－0.5円の方向性が注視されそうだ。

その他、過去のドル高局面を含めた暦年ベースでのドル/円の年間ドル高値については、前年末12月末の終値からの乖離幅が参考メドとして注目される。「年間ドル高値－前年末終値」の値幅については、昨年2025年が+2円、2024年が+21円、2023年が+21円、2022年が+37円、2021年が+12円、2020年が+4円などとなってきた。

現在の高市トレードのように、日本の政治・政策期待でドル高・円安が進展したアベノミクス相場では、2012年が+10円、2013年が+19円、2014年が+17円、2015年が+6円となっている。

今年の場合、参考の基準メドとなる昨年12月末の終値は156.83円前後となっていた。低め見積もりの+4円で160円超え、+6円で162円超えとなるほか、+10円で166円、+12円で168円、+15円で171円、+20円で176円という計算にもなる。





お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。